

窮しき女王吉祥天女の像を帰敬ひて現報を得る縁

第十四

聖武天皇の御世に、王宗二十三人同じき心を結び、次第をもて食の為に宴樂を設備けたまふ。一の窮しき女王有す。宴の衆の列に入りたまふ。十二の王次第を以ちて宴樂を設くること已に訖りたまふ。ただし此の女王のみ独りまだ食を設けたまはず。食を備くるに便無し。大に貧しき報を恥ぢたまひ、諸衆の左京の服部堂に至り、吉祥天女の像に對面ひて哭きて曰さく「我れ先の世に貧窮の因を殖ゑ、今窮しき報を受く。我が身は食の為に宴会に入り、徒らに人の物を啖ふ。食を設くるに便無し。願はくは我れに財を賜へ」とまうす。時に其の女王の兄、忿々しく走り来り、母に白して曰さく「快きかな。故京より食を備けて来る」とまうす。母王聞きたまひて走り到りて見たまへば、王を養へる乳母なり。乳母談りて曰さく「我れ老を得と聞く。故に食を具けて来る」とまうす。其の飲食蘭し。美き味の芬馥しきこと比無く等無し。見らぬ物無くして、設けたる器みな鏡なり。荷はしめたる人三十人なり。

王衆みな来りて饗を受けて喜びたまふ。其の食先より倍る。王衆讃めてのたまはく「富める王なり。然らば何れぞ貧しくして敢て能くする。余り溢ち飽き盈ちて、我が先に設けたるより尤れたり。儼歌の奇異しきこと鈞天の樂の如し」とのたまふ。或るいは衣を脱きて与へ、或るいは裳を脱きて与へ、或るいは錢と絹と布と綿との等きを送りたまふ。悦の望に勝べずして、衣と裳とを捧持ちて乳母に著せたまふ。然うして後に堂に参り、尊き像を拝まむとしたまふ。乳母に著せたる衣と裳と、其の天女の像に被る。疑ひて往き、乳母に問ひたまへば、答へてまうさく「知りず」とまうす。定めて知る、菩薩感応して賜ふ所なり、と。因りて大に財に富み、貧窮しき愁を免る。是れ奇異しき事なり。

法華經を写し奉り供養するに因りて母の女牛と作りし

因を顕す縁 第十五

高橋連東人は、伊賀国山田郡轍代里の人なり。大に富みて財饒なり。亡にたる母の奉為に法華經を写して盟ひて曰さく「我が願に縁有る師を請へ、

第十四縁 善業についての現報説話。今昔物語集・十七ノ四十六に書承。

一 女子である諸王。二世以下四世以上(令集解・職員令・中務省)。「女王ヒメオホキミ」(新日本紀・二十二)。

二 「空」は「衆」の意。下文には「王衆」とみえる。

三 この数字が何を意味するのかわかりません。

四 宴に出席する人々の一員となっていた。

五 この女王が宴を開く順番がまわってきたのである。

六 元興寺の小塔院の地に所在したか。

七 「食窮」は仏典語。「貧窮之因」の具体相は示されていない。儼、慳、貪、などの行為であろう。

八 「まづ」の表記を「窮」「貧」「貧」「貧」「貧」窮と変化させている。

九 運がいい。この呪はのことは伝えるためにだけに登場している。

一〇 松浦員俊は、本説話に關して「天平十二年十二月から同十六年正月迄、奈良の都を離れて居た間のことで、故京とは即ち平城京を指すものか」とする。当否を判断することが困難である。

一一 二世の女王には十三歳までは乳母が給せられた(後宮職員令、令集解・後令)。これをいうか。

一二 飲食をいれる器。金鳳翼。法隆寺伽藍縁起井流記寶財帳には白銅製のものが多くみえる。供物をいれるのに用いたのであろう。乳母の持ち来った飲食がすべて「鏡」にいれられていた、という記述は、この飲食が仏前にささげられた供物であったことを暗示している。

一三 この数字が何を意味するのかわかりません。

一四 この女王以前の二十二人の女王の宴で供さ

れた食物よりもすぐれている。

一五 富める女王でないならば、貧しくしてこのようにすることができるとはどうしてだろうか。

一六 この女王の宴において歌舞されたという記述はない。

一七 天上の音楽。文選・西京賦・李善注はしめ諸書にみえる。

一八 二十二人の女王のうちのある一人は。

一九 類似した説話展開の中巻三十四縁は、このあたりに「過々に豊かふ」とある。乳母は帰っていった、という記述は本説話に欠けている。

二〇 「然後」の前後に多くの時間経過が考えられる例に、上巻三縁がある。

二一 衣と裳とは、吉祥天女の靈験の証拠となっている。

二二 「大吉祥天女菩薩摩訶薩(大吉祥天女十二名号縁)」とあるように、吉祥天女は菩薩とされることがあった。覺經には菩薩の呼称が散見するが、本説話の時代としては珍しい呼称。

二三 「若衆養食及僧住処、隨所求者、皆令具足、金銀財宝、牛羊羖裘、飲食衣服、皆得隨心受諸供養」(金光明最勝王經・大吉祥天女增長財物品)。大吉祥天女十二名号縁には「能除一切貧窮業障、獲得豐饒財宝富貴」とある。後代の覺經・一〇九吉祥天は「大吉祥天女、利生第一、感應速疾也」としている。

二四 富める女王でないならば、貧しくしてこのようにすることができるとはどうしてだろうか。

二五 この女王の宴において歌舞されたという記述はない。

二六 天上の音楽。文選・西京賦・李善注はしめ諸書にみえる。

二七 二十二人の女王のうちのある一人は。

二八 類似した説話展開の中巻三十四縁は、このあたりに「過々に豊かふ」とある。乳母は帰っていった、という記述は本説話に欠けている。

二九 「然後」の前後に多くの時間経過が考えられる例に、上巻三縁がある。

三〇 衣と裳とは、吉祥天女の靈験の証拠となっている。

三一 「大吉祥天女菩薩摩訶薩(大吉祥天女十二名号縁)」とあるように、吉祥天女は菩薩とされることがあった。覺經には菩薩の呼称が散見するが、本説話の時代としては珍しい呼称。

三二 「若衆養食及僧住処、隨所求者、皆令具足、金銀財宝、牛羊羖裘、飲食衣服、皆得隨心受諸供養」(金光明最勝王經・大吉祥天女增長財物品)。大吉祥天女十二名号縁には「能除一切貧窮業障、獲得豐饒財宝富貴」とある。後代の覺經・一〇九吉祥天は「大吉祥天女、利生第一、感應速疾也」としている。

第十五縁 三宝・法十一に引用。三宝縁より本朝法華縁記・十一〇六に書承。今昔物語集・十二ノ二十五に書承。

三 未詳。本説話以外に所伝をみない。

三三 三重県上野市摩代(現)あたり。

三四 亡母の追善をおこなう、という東人の願いに関係のある僧。

凶人、姓文忌寸也。云云。上田三郎矣。天骨邪見、不信三宝、凶人之妻、有上毛野公大橋之女、一日一夜、受八齋戒、參行梅過、居於衆中、夫從外歸家、而見無妻、問家人、答曰、參往梅過、聞之瞋怒、即往喚妻、導師見之、宣義教化、不信受曰、為無用語、汝婚吾妻、頭可所割破、斯下法師矣、惡口多言、具不得述、喚妻歸家、即犯其妻、率爾閉著、蟻嚼痛死、雖不加刑、而發惡心、濫罵令恥、不恐邪姪、故得現報也、口生百舌、雖万言白、慎莫誹僧、倏蒙災故也、

3 文(來) 一 文
4 忌(來) 一 忌
5 橋(來) 一 橋

6 妻(來) 一 ナシ
7 解(國) 一 解
8 倏(國) 一 倏
9 災(來) 一 災

讀解蝦命放生現報所助緣第十二

山背國紀伊郡部內、有一女人、姓名未詳也、天年慈心、隨信因果、受持五戒十善、不殺生物、聖武天皇代、彼里牧牛村童、山川解取八、而將燒食、是女見之、勸牧牛曰、幸願此解免我、童男辭不聽、曰猶燒噉、慙謝乞、脫衣而買、童男等乃免之、勸請義禪師、令祝願以放生、然後入山、見之大蛇、飲於大蝦、詭大蛇言、是蝦免我、略奉多帛、蛇不聽吞、女寡幣帛、而禱之曰、汝為神祀、幸乞免我、不聽猶飲、又語蛇言、替此蝦以吾為汝妻、故乞免我、蛇乃聽之、高捧頭頸、以瞻女面、吐蝦而放、女期蛇言、自今日經七日而來、然白父母、具陳蛇狀、父母愁言、汝了唯一子、何誑託故、作不能語、時行基大德、有紀伊郡深長寺、往白事狀、大德聞曰、烏呼難量之語、唯能信三宝耳、奉教歸家、当期日之夜、閉屋堅身、種々發願、以信三宝、蛇繞屋、蛇

1 讀 一 讀
2 曰(來) 一 白
3 否(來) 一 ナシ
4 詭(來) 一 詭
5 蝦(來) 一 蝦
6 幣(來) 一 幣
7 替(來) 一 替
8 期(來) 一 期
9 汝(來) 一 ナシ
10 聞(來) 一 聞

軀腹行、以尾打壁、登於屋頂、咋草拔開、落於女前、雖然蛇不就女身、唯有爆音、如跳鱗、明日見之、大解八集、彼蛇然、揃段切之、乃知、讀放解報恩矣、無悟之虫、猶受恩返報恩、豈人心忘恩歟、自此已後、山背國、貴乎山川大解、為善放生也、

11 登(來) 一 登
12 背(來) 一 背

生愛欲戀吉祥天女像感示奇表緣第十三

和泉國泉郡、血淨上山寺、有吉祥天女攝像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞、來住於其山寺、曉之天女像、而生愛欲、繫心戀之、每六時願、々如天女容好女賜我、優婆塞夢見、婚天女像、明日瞻之、彼像裙腰、不淨染汚、行者視之、而慚愧言、我願似女、何忝天女事自交之、愧不語他人、弟子儉聞之、後其弟子、於師無礼、故遭擯去、所擯出里、訕師程事、里人聞之、往問虛美、並瞻彼像、淫精染穢、優婆塞不得隱事、而具陳語、諒委深信之者、無感不心也、是奇異之事矣、如涅槃經云、多姪之人、画女生欲者、其斯謂之矣、

1 上(國) 一 ナシ
2 境(國) 一 境
3 語(國) 一 語
4 之(來) 一 ナシ

窮女王歸敬吉祥天女像得現報緣第十四

聖武天皇御世、王宗廿三人、結同心、次第為食、設備宴樂、有一窮女王、入宴衆列、廿二王、以次第設宴樂已訖、但此女王、獨未設食、備食無便、大恥貧報、至

1 王(國) 一 ナシ

于諾樂左京服部堂、對面吉祥天女像、而哭之曰、我先世殖貧窮之因、今受窮報、我身為食、入於宴會、徒瞰人物、設食無便、願我賜財、于時其女王之兄、念々走来、白母曰、快從故京、備食而來、母王聞之、走到見之、養王乳母、々々談之曰、我聞得客、故具食來、其飲食蘭、美味芬馥、無比無等、無不具之物、設器皆碗、使荷之人、卅人也、王衆皆來、受饗以喜、其食倍先、王衆讚稱、富王、不然何貧敢能、余溢飽盈、尤我先設、儂歌奇異、如鈞天樂、或脫衣以与、或脫裳以与、或送錢絹布綿等、不勝悅望、捧持衣裳、著之乳母、然後參堂、將拜尊像、著之乳母衣裳、被之其天女像、疑之而往、問之乳母、答之不知、定知、菩薩感心所賜、因大富財、免貧窮愁、是奇異之事矣、

2 身(国)十五

3 々々一々

4 之(米)一足

5 碗(米)一錠

6 才佐

7 鈞鈞

8 持得

奉寫法華經、因供養願母作女牛之因、緣第十五

1 因(国)同

高橋連東人者、伊賀国山田郡瞰代里人也、大富饒財、奉為亡母、寫法華經、以盟之曰、請於我願有緣之師、欲所濟度、敝法會、將供明日、而誠使曰、值第一、以為我緣師、有修法狀、不過必請、其使隨願、出門試往、至於同郡御谷之里、見有乞者、鉢囊懸肘、醉酒臥路、姓名未詳、有伎戲人、剃髮懸繩、以為契娑、雖為然猶曾不覺知、使見起礼、勸請歸家、願主見之、信心敬礼、一日一夜、家内隱居、頓作法服、以之奉施、爰乞者問之、所以者何、答曰、請令講法花經、乞者、我無所學、唯誦持般若陀羅尼、乞食活命、願主猶請、乞者思議、不如竊逃、兼心知逃、副人令守、

2 賀一勢

3 亡一ナシ

4 誠一試

5 路洛

6 唯准

彼夜請師、夢見、赤牝來至告言、我此家長公母也、是家牛中、有赤牝牛、其見吾也、我昔先世、偷用子物、所以今受牛身、以償其債、明日為我、將說大乘之師、故責而慙告知、欲知虛實、說法堂裏、為我敷座、我当上居、請師自夢驚醒、心内大怪、明朝登講座、言、我無所覺、隨願主心、故登此座、唯有夢悟、具陳夢狀、檀主聞起、敷座喚牝、々伏座、於是檀主、大哭言、我母、我曾不知、今我奉免、牛聞大息、法事訖後、其牛即死、法會之衆、悉皆号哭、饗于堂庭、往古已後、莫過斯奇、更為其母、重修功德、諒知、願主顧母恩、至深之信、乞者誦神呪、積功之驗也、

7 恩一息

依不布施与、放生而現得善惡報、緣第十六

聖武天皇御代、讃岐国香川郡坂田里、有二富人、夫妻同姓、綾君也、隣有耆嫗、各居鰥寡、曾無子息、極窮裸衣、不能活命、綾君之家、為所乞食、日々不闕、鋪時而逢、主將試之、而每夜半、竊起爨令食於家口、猶來相之、合家怪之、家室告家長曰、此二耆嫗、驅使非便、我慈悲故、入家兒數、長聞之曰、採飯而養、自今已後、各缺自分、施彼耆嫗、功德之中、割自身六、施他救命、最上之行、今我所作、稱彼功德、家口必語、析分飯而養、彼家口中、有一使人、不隨主語、獸於耆嫗、漸諸使人、又獸不施、家室竊掃分飯而養、當懷之人、讒長公曰、缺使人分、有耆嫗故、瞰飯少、飢疲之者、不能營農、令懈產業、讒之不輟、猶送於養、讒之家口、副單釣人、入海

1 鋪鋪

2 使(国)一仗

3 六元

4 救(国)一赦

5 析(国)一折

6 諸(国)一ナシ

7 產業(国)一產

8 讒(国)一說

9 單置

10 單置